

滋賀県立大学 研究シーズ集

Research Seeds **2017**



滋賀県立大学

目 次

〈研究シーズ〉

学部学科等		職名	氏名	タイトル	ページ
環境科学部	環境政策・計画学科	准教授	瀧 健太郎	持続可能な流域社会の実現に向けた政策研究	1
	環境建築デザイン学科	教授	村上 修一	地域の将来像を描く／景観の新たな価値を創造する	2
		准教授	ヒメネス ベルデホ ホアン ラモン	タクロバン市（フィリピン）での仮設住宅の再利用に関する研究	3
工学部	材料科学科	助教	鈴木 一正	溶液プロセスを用いてナノ～メソ～マクロ構造を設計した有機－無機複合材料の作製とその物性制御	4
		准教授	加藤 真一郎	構造的・電子的に新奇な縮合多環共役化合物の開発：自己集合型エレクトロニクス材料の創製	5
	機械システム工学科	准教授	橋本 宣慶	技能の訓練（人工現実感による訓練用シュミレータ） 技能の解析（動きや力の使い方による技能の評価）	6
	電子システム工学科	教授	岸根 桂路	超高速回路設計技術～応用システムへの展開	7
		准教授	土谷 亮	CMO S 集積回路におけるアナログ回路設計技術の研究	8
		助教	井上 敏之	高性能無線通信システムのための R F フロントエンド I C に関する研究	9
人間文化学部	地域文化学科	助教	横田 祥子	中国系女性移民と子供のディアスポリック空間の形成をめぐる研究	10
	生活デザイン学科	助教	山田 歩	マーケティング・消費者行動	11
	人間関係学科	准教授	原 未来	ニート・ひきこもり等の状態にある若者への支援	12
		助教	後藤 崇志	人の主体的なふるまいに関する心理学研究	13
人間看護学部	人間看護学科	教授 助教	河野 益美 森本 安紀	特別養護老人ホームの公助・共助・自助・互助の力を結びつける仕組みづくり	14
		准教授	大脇 万起子	育児・療養支援のためのアプリケーションの開発 子供の発達に関する知識の応用	15
全学共通教育推進機構		准教授	ウォルター カート クリンガー	航空管制の安全を脅かす母語話者の発音の乱れと対策の研究	16

持続可能な流域社会の実現に向けた政策研究

環境科学部 環境政策・計画学科 准教授 瀧 健太郎

研究分野：流域政策・計画

研究室HP：<http://www.shiga-rivers.com>

流域の水循環と社会システムとの相互関係に着目し、持続可能な流域社会の実現に向けた政策や計画に関する研究を進める。流域政策・計画に関する学問分野の体系化を目指す。

■ 流域の健康診断

洪水災害や渇水などの流域における自然災害のリスクや、社会資本・制度の効果（人為的サービス）、自然の恵み（生態系サービス）を定量的に評価して、流域で顕在化している課題を明らかにする。流域に関わる諸計画や政策のベースとなる客観的根拠を実社会に提案することを目標とする。

■ 川や水辺の自然再生

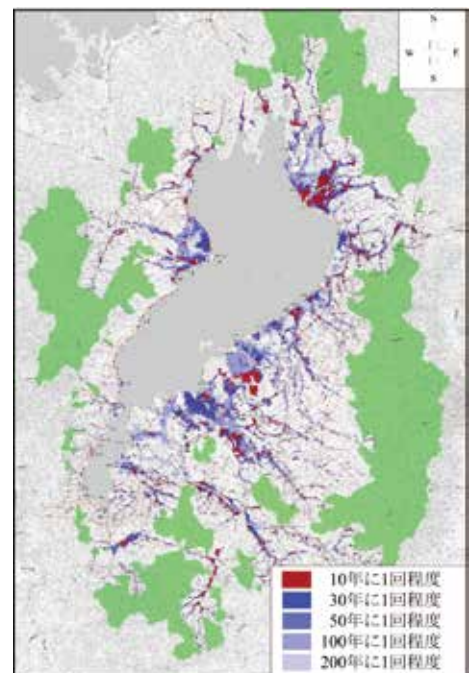
これまで琵琶湖や河川、水路では、治水施設や利水施設が積極的に整備され、流域の安全性や利便性は向上したが、一方で、固有種が減少するなど生態系の劣化が進んだ。そこで、実際に良好な環境が失われた湖辺、河川、水辺を対象に、在来種・固有種の生息・生育環境の再生方法について研究している。

■ 減災型治水システム

地球規模の気候変動の影響により、今後、水害のリスクが増大すると言われている。人間社会が自然と共生し、より激しくなる洪水に備えるには、連続堤防やダムなどの施設整備だけではなく、土地利用やまちづくり、避難体制の充実など、さまざまな対策を総動員する必要がある。さまざまな対策を総動員して、流域全体で被害を最小限にとどめる「減災型治水」のあり方や実現方法について研究している。

■ 川や水辺と社会・暮らしとの関わり

地域のまちなみ、文化、暮らしのありようは、流域の水循環と深い関わりがある。「善く国を治める者は、必ずまず水を治める。」という故事もある。地域の歴史を紐解きながら、かわ歩き、まち歩き、聞き取り調査を通じて、治水/利水/環境/文化などのさまざまな面から、湖や川、水辺と地域社会との相互関係を明らかにし、これからの社会や暮らしのありようを探っている。



床上浸水発生確率図

■ 統合的流域管理

流域の抱えるさまざまな課題を解決していくためには、客観的根拠に基づいた課題設定がなされ、さまざまな主体（国、自治体、民間事業者、NPO、市民・住民など）が連携・協働していく「流域ガバナンス」を機能させていく必要がある。諸外国の事例も参考にしながら、行政区画や部局・部門間の垣根を越えて、流域単位で統合的に政策を進めていくための社会システムのあり方を探っている。

〈特許・共同研究等の状況〉

総合地球環境学研究所 研究プロジェクト「人口減少時代における気候変動適応としての生態系を活用した防災減災（Eco-DRR）の評価と社会実装」など

地域の将来像を描く/景観の新たな価値を創造する

環境科学部 環境建築デザイン学科 教授 村上修一

研究分野：ランドスケープデザイン、景観計画

研究室HP: <http://www.form.e-arc.jp/>

諸事象の相互作用の結果として立ち現れる様相をランドスケープと言う。諸事象の解釈から地域の将来像を描くことに取り組んでいる。また、諸事象に対する新しい見方を発見し、新たな景観価値を創造することにも取り組んでいる。

■地域の将来像を描く

社会の縮退や、自然災害の危険性など、地域の将来像が見えにくい状況にある。土地特性の解析や、地域資源の発掘をととして、地域の将来像を描くことに取り組んでいる。これまでの成果の一部を以下に挙げる。

2014年：近江八幡市官庁街ランドスケープデザイン

2012年：長浜市小谷城スマートIC利活用計画

2012年：長浜市田村山の保全とカスミサンショウウオ生息池の計画

2011年：東近江市奥永源寺振興計画

2011年：東近江市景観重要建造物指定に関する調査

2011年：愛荘町湖東三山スマートIC周辺地域活性化計画

2011年：長浜市公園リニューアルワークショップ

2010年：長浜市四居家ポケットパーク計画

2009年：東近江市永源寺東部の地域資源に関する調査

2006年：長浜米原まんなかまちづくり構想

2005-2009年：草津市におけるヨシを用いて湖岸との関わりを再生する取り組みの支援

2005-2008年：大津市における都市水路をいかす商店街活性化プロセスの提案



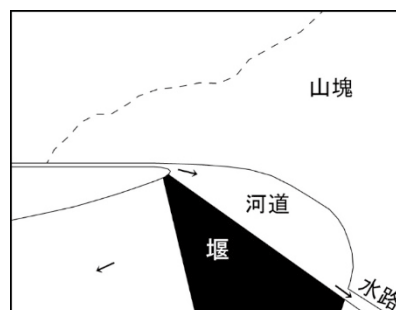
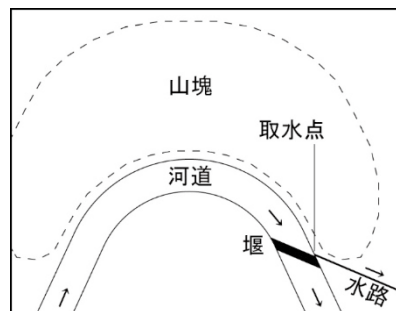
東近江市奥永源寺振興計画（2011年）における元中学校を活用した道の駅の計画案（作図：木村真也）

■景観の新たな価値を創造する

審美性という従来の景観価値とは異なり、空間の豊かさにつながる解釈の多様性や、人と自然の関わりの有様があらわれる親水性・文化性といった、景観の新たな価値の創造に取り組んでいる。これまでの成果の一部を以下に挙げる。

2002-2017年：歴史的な堰の親水性および地形との関係性が織り成す景観の研究（日本造園学会賞（研究論文部門）受賞）

1998-2004年：米国近代ランドスケープデザインにおける形態の曖昧性に関する研究（日本造園学会研究奨励賞受賞）



歴史的な堰と地形の関係性が織り成す景観（2016年）
国内51水系90堰の取水点において、洪水をいなく堰の配置、滞筋が安定しやすい河道や山塊との関係が眺望可能なことを明らかにした。

タクロバン市（フィリピン）での仮設住宅の 再利用に関する研究

環境学部 環境建築デザイン学科 准教授 ヒメネス ベルデホ ホアン ラモン

研究分野: 建築史・意匠・都市計画・建築計画

研究室HP: http://dda-usp.com/professor/juan_ramon

大型台風ヨランダによる災害後のフィリピンタクロバン市を直接の研究対象とし、実施調査を通して被災者の仮設住宅の居住環境を物理的側面から実態的に捉えるとともに、被災後の復興住宅計画に資する実態的に即した指針を得ることを目的としている。

■タクロバンの仮設住宅の再生

仮設住宅は、被災者が被災前のような日常生活を取り戻すまでの一時的な生活スペースとしての役割を担っている。大規模災害の後に必要となる仮設住宅のタイプは、テントなどの早急に準備できるものから、材料を提供するだけのもの、必要設備やインフラを整えたものまで、さまざまなタイプがある。しかし、仮設住宅は一時的な住宅であるため、設計も簡易的になり問題は常にある。

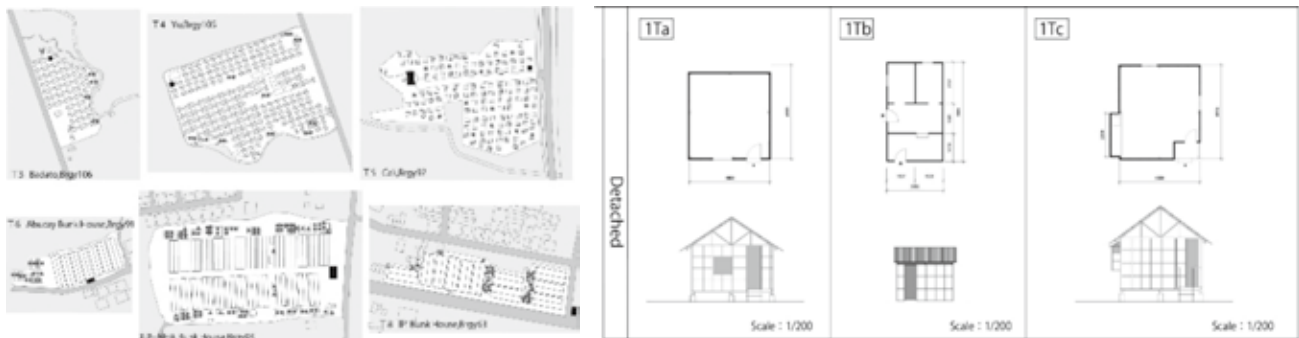
タクロバン市では、台風によって発生した高潮による被害の住宅復興を契機に、防災と環境保護の理由から40mを「建築規制区域」として住宅再建を禁じている。そのため沿岸部に集中する貧困層の居住地は一掃され、その住民は市の北部または内陸に位置する仮設住宅地に再定住を余儀なくされる。

再定住のために用意された敷地は合計30～50ヘクタールで、1万戸の恒久住居が建設される。使用期間が半年から3年6ヶ月を目安とし、長期的な使用を目的としないため、持続不可能な設計になっている。加えて、一般的な建材を使用するため一般住宅と同等に費用が必要となる場合がある。また建設バブルによる施工者不足によって一般住宅の計画にも遅れが生じつつあることも問題であるといえる。

このようにタクロバン市では台風被害を契機として、過去に前例の無い大規模な住宅供給と再定住計画が実施されようとしている。被災者や貧困層に安定した住環境を提供することは重要な問題であるが、このような大規模な移転を伴う居住環境の整備は対象者のほとんどが職住近接の生業を営む低所得者に対して、新たな社会困窮を引き起こす恐れがある。

また災害の被災地とは先進国・発展途上国を問わず深刻な住宅問題が発生する場所である。それは世界中で発生している住宅問題が瞬間的に大規模発生し、さらに短期間での解決が求められる特殊な環境であるからである。

以上の観点から、台風被害の復興住宅計画の居住環境を明らかにすることで、将来性のある住宅建設を行い、適切なまちづくりとより良いセカンドライフを過ごせる居住環境の普遍的な指針を得るのが目的である。



溶液プロセスを用いてナノ～メソ～マクロ構造を設計した有機―無機複合材料の作製とその物性制御

工学部 材料科学科 助教 鈴木 一正

研究分野: 有機―無機複合材料、蛍光材料、溶液プロセス

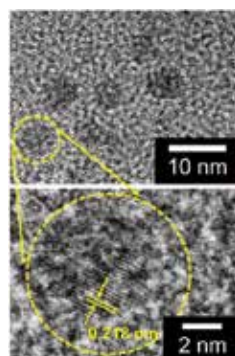
<http://metal1.mat.usp.ac.jp/~metal-labo/>

ゾル―ゲル法や水熱法などの溶液プロセスを用いて、(1) 有機―無機ナノコンポジット固体蛍光材料の開発、(2) 機能性粒子の異方成長・凝集制御、(3) 微細しわ構造を用いたスマート材料の開発等、材料の構造と物性の相関について研究を進めている。

■カーボンドットの固体蛍光材料への利用

カーボンドット (C-dots) は炭素骨格からなる10nm程度の蛍光性ナノ粒子である。豊富な資源から合成可能で、毒性が低く、水分散性にも優れるなど、多くの利点を有するため、新たな蛍光材料として医療・電子・光学分野での利用が期待されている。

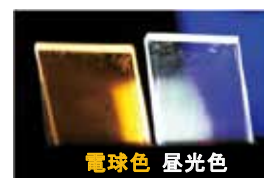
現在、C-dotsと金属酸化物との複合化を行い、材料間界面での相互作用を誘起することで、固体蛍光材料の発光効率の向上や蛍光波長の調律に関する研究を行っている。一例として、蛍光性半導体である酸化亜鉛 (ZnO) とC-dotsを接近させると、エネルギー移動が誘起され、C-dotsの蛍光が増感する。エネルギー移動を誘起したZnO―C-dots複合薄膜をゾル―ゲル法により作製し、C-dots濃度に応じた様々な色度の蛍光薄膜を得ることに成功している。



グラファイト状層状構造からなる10nm以下のC-dots



C-dotsの良好な水分散性(左)とUV照射下での蛍光特性(右)

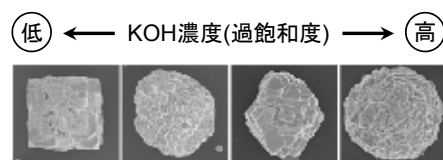


ZnO薄膜内のC-dots濃度に伴う蛍光色の変化

■水熱法による異方性粒子の凝集・成長プロセスの制御

金属や酸化物などのナノ結晶は、キューブ・八面体・シート・ワイヤーなどの粒子形態に応じた特異な物性を示す。この特性を実用デバイス等に応用するため、ナノ粒子の異方性を維持したままのスケールアップ技術に取り組んでいる。

一例として、強誘電体材料であるBiFeO₃粒子の水熱合成を行い、反応溶液内の不安定さ(過飽和度)をKOH濃度により変化させることで、凝集・成長プロセスを制御し、表面粒子形態を反映した凝集体の作製に成功している。

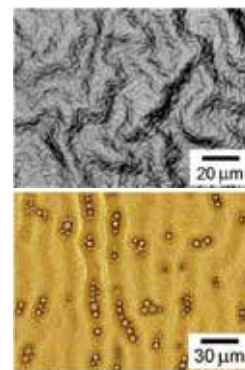


数十μmスケールで形態制御されたBiFeO₃粒子

■光誘起による入れ子状微細しわ構造の作製と外場応答性

力学特性の異なる多層膜では、層の界面に生じる応力ミスマッチにより、表面周期しわ構造が形成する。微細しわ構造を有する有機―無機ハイブリッド薄膜は、フレキシブル電子デバイスやマイクロレンズ、微小流路のスイッチング等への応用が期待されている。

光重合性モノマーとシリコンアルコキシドから成る有機―無機ハイブリッド薄膜を成膜し、UV照射を施すことで、薄膜表面近傍での光重合と下部層でのシリカ重合に伴う収縮を誘起し、ポリマー表面層、中間層、シリカ下部層の3層からなる薄膜を作製し、階層的周期を有する入れ子状のしわ構造を形成した。この入れ子状しわ構造は湿度に対して応答性を示す。これを応用して、異なるサイズの粒子が分散した水溶液中で、しわ構造周期によるサイズ選択的な粒子の担持に成功している。



入れ子状しわ構造(上)としわ構造による粒子担持(下)

構造的・電子的に新奇的な縮合多環共役化合物の開発: 自己集合型エレクトロニクス材料の創製

工学部 材料科学科 准教授 加藤 真一郎

研究分野: 構造有機化学、超分子化学、物理有機化学

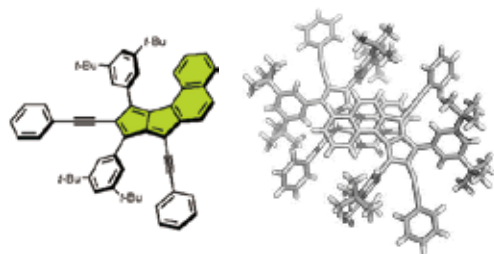
<http://www.mat.usp.ac.jp/environ-materials/kato.html>

反芳香環、環状アルキン、複素芳香環を構造的・電子的モチーフとして、拡張した π 共役平面を有する化合物を合成し、その特異な電子状態と自己集合特性に基づくエレクトロニクス材料への応用を目指している。力量ある有機合成と精緻な物性評価を通じた構造—物性相関の解明/確立により、新規材料開発の指針を提供する。

■安定な反芳香族縮合多環化合物の開発

反芳香族化合物は優れた電子供与性と受容性を兼ね備えており、エレクトロニクス材料になり得る潜在性を秘めている化合物だが、その低い安定性ゆえに材料開発への展開が阻まれていた。

独自の分子設計と合成手法により、安定な反芳香族縮合多環化合物を創製することに成功した。系統的な合成と物性評価を通して、適切な化学修飾により反芳香族性、電子授受特性、そして光吸収特性の制御が可能であることを見出している。

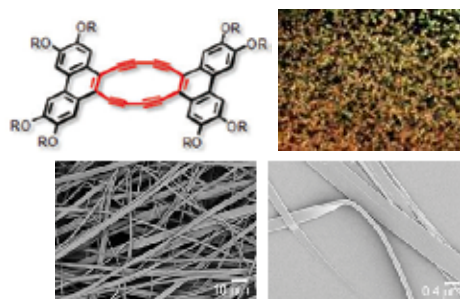


安定な反芳香族化合物と、その分子配列

■縮合多環芳香環が融着した環状アルキンの開発

ナノメートルスケールの分子サイズをもつ環状アルキンは、光電子機能を有する2次元共役化合物として注目を集め、その物質開拓が望まれている。

環状アルキンに縮合多環芳香環を融着させた化合物を合成し、それぞれの構造的・電子的特徴を相乗的に反映した物性を示す化合物の合成を行っている。具体的には、液晶性を示したり、マイクロメートルスケールの1次元ファイバーを形成したりする化合物の合成に成功している。

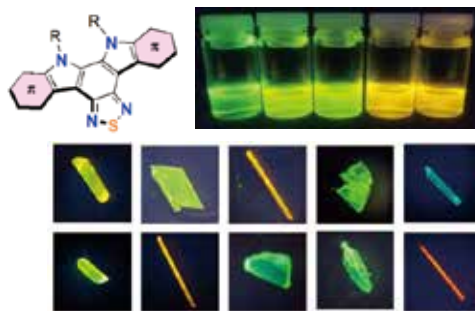


複屈折（液晶性）と1次元ファイバー

■電子供与性部位と求引性部位を併せ持つ複素芳香環の開発

電子供与性部位と求引性部位を連結し、分極した電子状態を有する化合物は、小さなHOMO-LUMOギャップを有し、またしばしば強い蛍光発光特性を示すため、機能性色素として重要な化合物群である。

電子供与性部位と求引性部位を“縮合”した、従来とは異なる複素芳香環を開発し、半導体材料や固体発光材料へと展開している。例えば、一つの化合物から複数の結晶が得られ、それらの結晶が分子配列に応じて異なる蛍光色を示す現象などを見出している。



溶液及び個体状態における発光挙動

〈特許・共同研究等の状況〉

国内の複数の大学・研究機関と、物性・材料評価に関して共同研究を遂行している。

技能の訓練（人工現実感による訓練用シミュレータ）

技能の解析（動きや力の使い方による技能の評価）

工学部 機械システム工学科 准教授 橋本 宣慶

研究分野：生産加工学、人間工学、人工現実感

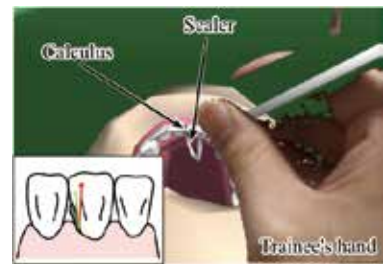
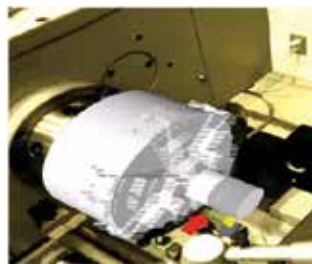
製造現場で人が行う作業にはコツやカンが必要であるが、それを新規の作業者に正しく伝える（技能伝承）ことは難しい。その課題に対して、人工現実感によるシミュレータを使った訓練方法、身体動作や筋活動の測定結果にもとづいて客観的な技能評価方法を提案する。切削加工作業、電気溶接作業、歯科診療作業を対象として、効率的に技能伝承を行う手法について研究している。

■技能の訓練（人工現実感による訓練用シミュレータ）

人工現実感により仮想の作業環境をシミュレートし、その内で人間に訓練をさせるシステムである。訓練に使用する消耗品が少なく、危険を及ぼすものを排除したり、繰り返し同じ状況を再現したりすることで、低いコスト・高い安全性・高い効率で訓練することができる。現在は、シミュレーションの精度を上げて訓練効果を向上させることや、仮想環境でしかできない訓練方法を模索している。



普通旋盤作業のシミュレータ



歯石除去作業のシミュレータ

■技能の解析（動きや力の使い方による技能の評価）

技能者が作業を行っているときの身体の動きや力の使い方等を様々なセンサーで測定し、そのデータに基づいて客観的に技能のレベルを評価する。さらに、作業における不足点を見つけてアドバイスを自動で行うことを目指している。



作業者の腕の動作と表面筋電位の測定装置

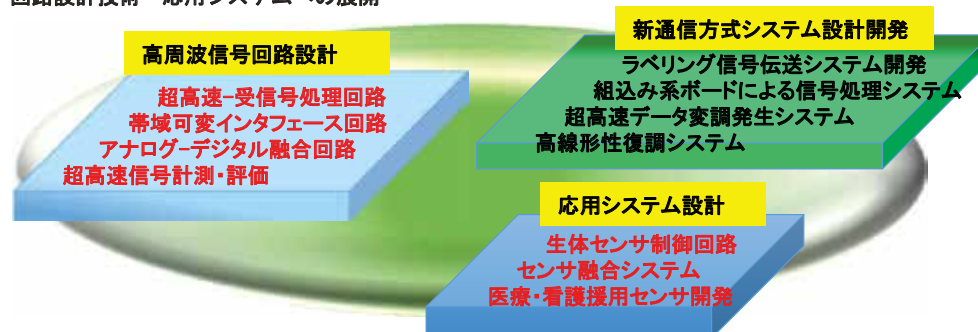
超高速回路設計技術～応用システムへの展開

工学部 電子システム工学科 教授 岸根 桂路

研究分野：集積システム

超高速・超低電力アナログ・デジタル混載回路の設計技術をベースに、光通信システム用モジュールICの研究から、スマート通信方式の提案・実装、センサ応用技術開発まで幅広く研究分野を展開しています。

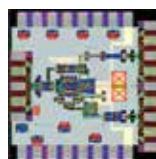
回路設計技術～応用システムへの展開



■微細CMOSによる 超高速 光電気融合通信システム用回路の研究・開発

次世代高速通信システムの実現にむけ、電子回路分野で光通信システムアナログフロントエンド回路の研究・開発を実施しています。高速発振回路から光電気融合システムにフォーカスした送受信回路まで、研究室で解析・設計から評価・検証までを実施します。

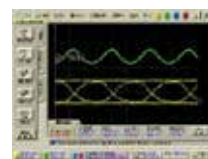
1mm × 1mm



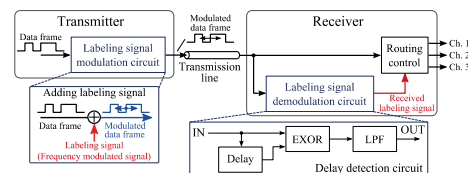
40Gb/s-CDR回路



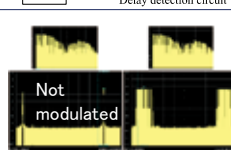
高周波信号評価系



CDR出力波形



システム評価系



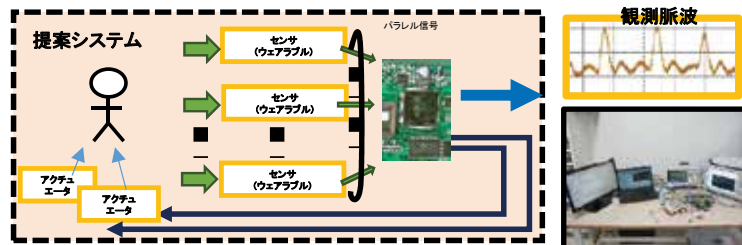
観測スペクトル

■新通信方式 信号伝送システムの開発

高効率な伝送システムの実現にむけ、既存データ信号の通信フレーム構成を改変することなく、付加データ（ラベリング信号）を位相変調によりアドオンをする方式を提案しています。組込み系FPGAボード、高速アナログ回路、フィルタを組み合わせシステム構築し、受信部チャンネル切替動作を確認しました。

■センサ融合—高速リアルタイム制御システムの開発

複数のセンシング信号を同時処理し、処理信号に基づき、アクチュエータの制御をする等、計測-演算-アクチュエータ制御をリアルタイムで実現することを目指します。



〈共同研究・特許等の状況〉

- 超小型光受信フロントエンドにむけた超低電力クロック同期回路の研究（企業との共同研究）
- シングルチャネル—マルチポート制御インタフェース回路の研究（科学研究費補助金）

CMOS集積回路におけるアナログ回路設計技術の研究

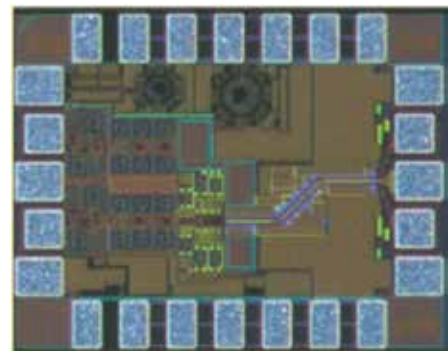
工学部 電子システム工学科 准教授 土谷 亮

研究分野：集積回路、アナログRF回路、低消費電力技術

CMOS集積回路での超高速通信用回路や、デジタル回路の低消費電力化を支えるアナログ回路の設計技術を研究しています。また、それら回路技術を応用したデバイス・システムへの展開も検討しています。

■ 光通信用高速アンプ

光通信は従来の長距離通信だけでなく、より短い距離への通信にも利用されようとしています。高性能な計算機だけでなく、自動車の車内ネットワークへも導入の検討が進んでおり、光通信用回路の需要は高まっています。この研究ではCMOSを用いて高速でノイズに強い光受信回路の設計を行なっています。CMOSは化合物半導体に比べてアナログ回路の実現には不利な点が多いですが、CMOSで高性能なアナログ回路を実現できれば、ロジック回路との混載など多くのメリットを受けることができます。

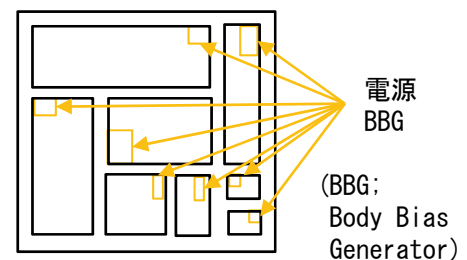


高速アンプ試作チップ。

■ 低消費電力化のためのアナログ回路

低消費電力化は集積回路の至上命題と言ってもよい課題です。製造プロセス微細化では低電力化は達成できなくなっており、様々な工夫が議論されています。その一つが、デジタル回路の電源や基板バイアスをアナログ的に調整し、回路の動作中にも細やかな性能調整を行なうという方法です。つまり忙しいときは高速に、暇なときは低電力で低速に動作する、ということを細かい単位で調整します。

そのための電源回路は小さく、広い電源電圧範囲でも動作でき、さらには簡単に設計できるものである必要があります。そのような要求を満たす電源回路の検討を行なっています。

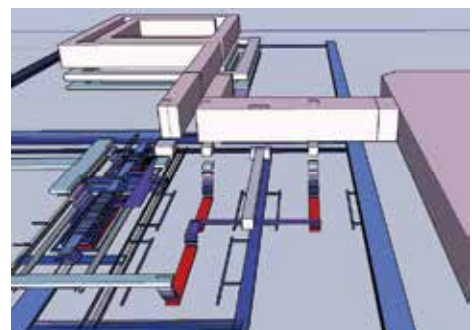


低電力チップの概念図。

分割された領域それぞれが最適な状態で動作するようアナログ回路が調整する

■ アナログ回路設計支援環境の構築

集積回路の設計において、デジタル回路の設計は高度に自動化され、動作を記述したプログラムコードから数百万、数千万といった規模の回路図や物理的な配置を自動的に決定するシステムが使われています。一方でアナログ回路は自動設計が難しく、同じ回路であっても熟練者と初心者で大きく性能が異なってしまいます。このことはアナログ-デジタル混載チップの実現において大きなハードルとなっています。そこで、アナログ回路で使われる要素を配線まで含めてブロック化し、それを並べると回路が完成するというシステムを検討しています。熟練者のフルカスタム設計された回路より性能は劣りますが、初心者でも簡単に確実に動作させることができる環境の実現が目標です。



アナログ回路の内部構造概略図。
様々な構造が混在し、設計難易度が高い

高性能無線通信システムのための RFフロントエンドICに関する研究

工学部 電子システム工学科 助教 井上 敏之

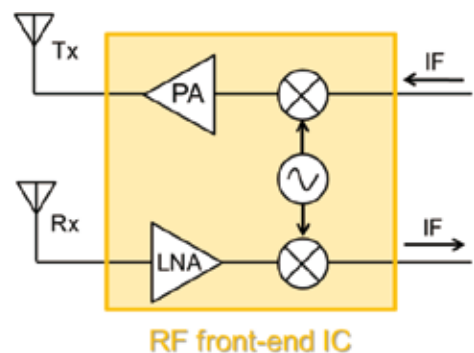
研究分野: 集積回路、無線通信、光ファイバ無線

研究室HP: <http://www.e.usp.ac.jp/~ectw/index.html>

スマートフォン等の携帯端末の急速な普及に伴い、高速・大容量の無線通信の必要性が高まっています。また、安全・安心な社会の実現のために、センサネットワークによる周囲の状況の変化に関する情報の取得および制御が重要となります。本研究では、これらの無線システムのためのRFフロントエンドICの提案・実証を行います。

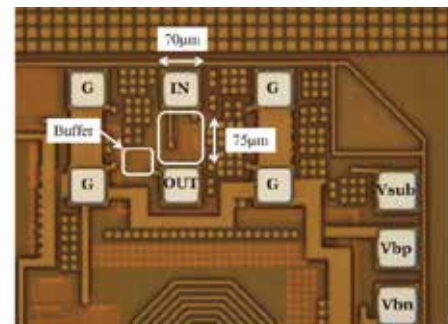
■小型・低電力RFフロントエンドIC

CMOS技術を用いることにより小型で低消費電力のRFフロントエンドICを安価に実現できます。また、後段の信号処理を行うデジタル回路と混載したシステムオンチップ（SoC: System on a chip）への応用も可能であることから、移動体端末やワイヤレスセンサ端末等の小型化や低消費電力化が期待できます。アンテナで受信した微弱なRF信号の増幅に用いる低雑音増幅器（LNA: Low noise amplifier）においては、インダクタを用いることにより、容易にインピーダンス整合して高利得が得られる一方で、狭帯域・チップの面積の増大により広帯域化・小型化の点で問題があります。そこで、インダクタレスCMOS-LNAにより小型化・広帯域化の実現を目指します。



■ミリ波・テラヘルツ波帯IC

近年、移動体端末の急速な普及に伴い、無線通信容量が増加の一途をたどっています。そのため、広帯域を確保できるミリ波帯やテラヘルツ帯無線通信システムが注目を集めています。そこで、これらに応用が可能なミリ波・テラヘルツ波帯ICの実現を目指します。既存のCMOS-ICでは高速化や高出力化に限界があることから、高移動度を有する化合物半導体（InP等）プロセスを用いた超高速ICの実現を試みます。



インダクタレスLNAの例

M. Parvizi et al., IEEE Trans. Microw. Theory Tech., 64, p1843, 2016.

■センサネットワークシステムへの応用

高齢化社会の進行に伴う見守り支援システムの重要性や、工業・農業分野等での効率的な生産・安全性の確保の観点から、センサネットワークシステムの実現が期待されています。上記で述べたRFフロントエンドICの技術を生かし、無線通信を利用したセンサネットワークシステムの構築に取り組んでいきます。このような取り組みにより、本学の「地域ひと・モノ・未来情報研究センター」が推進する『スマート看護』・『スマート農業』・『スマート観光』に貢献できる技術開発を目指します。



センサネットワークシステムの例

中国系女性移民と子供のディアスポリック空間の形成をめぐる研究

人間文化学部 地域文化学科 助教 横田祥子

研究分野：社会人類学、宗教人類学、地域研究

台湾、インドネシアを中心として、中国系女性の婚姻移動と子供の移動の経験、及びその出身社会、移住先社会に対するインパクトについて研究しています。

■再生産労働の国際分業下における中国系女性移民

台湾、インドネシア、香港、マレーシアにて調査

人間の再生産や、性サービス・養育・介護に関わる労働を「再生産労働」といいます。近年、「再生産労働」は先進諸国と第三世界の間で分業されるようになっていきます。再生産労働者を送り出す社会は、その経済において海外からの送金に依存せざるを得なくなっています。

中国系移民は、通商や苦力貿易など長い移動の歴史を誇りますが、その主体は男性でした。しかし、再生産労働の国際分業時代においては、中国系移民女性が、文化的共通性の多い他の中国系住民の地域・国へと移住し、家族形成を行っています。再生産労働、エスニシティが絡み合い、どのような家族形成がなされているのか、女性の出身社会、定住先社会へのインパクトを調べるため、現地調査を行っています。



■中国系女性移民の移動に伴う子供の移動経験

台湾、インドネシアにて調査

成人の移動性が高まるにつれ、子供の移動性も付随して高まっています。子供達は定住先への適応が求められるとともに、学業・就業面での難関をも突破しなくてはなりません。言語、習慣の学習と適応、出身地と定住先という少なくとも二つの社会の経験を、どのように調整しているのかを調べています。

研究成果は、具体的サポートに活用されることを願っています。また移動の経験は、今後さらに特別なものではなく、私たちが世界を捉える上で重要な視点を提供してくれるものと考えています。



■インターエスニック状況の宗教人類学研究

インドネシア西カリマンタン州にて調査

西カリマンタン州シンカワン市は、婚姻移民を多数、台湾などへ送り出してきました。また、シンカワン市は Kota Seribu Kelenteng（幾千もの中国寺廟のある町）と呼ばれており、シャーマンがいたるところで見られる町です。

当地の信仰は、華人・ダヤック人・ムラユ人という三大エスニックグループの関係を反映しており、錯綜しています。インターエスニックに形成されている信仰を調査し、当地の世界観・宗教観を明らかにしようとしています。



〈特許・共同研究等の状況〉

科学研究費（基盤研究A）「アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層社会の出現に関する実証研究」（2016-2020年）研究分担者

科学研究費（基盤研究B）「海のアジア再考—英領マラヤ・東アジアネットワークの歴史と現在—」（2016-2019年）研究分担者

マーケティング・消費者行動

人間学部 生活デザイン学科 助教 山田 歩

研究分野：マーケティング論、消費者行動論

消費者の行動傾向を分析することを通して、製品やサービスの価値を高める方法を考えていきます。製品・サービスの利用実態調査や消費者行動実験を行うことによって、既存の製品・サービスの問題の発見と改善、また、新しい製品・サービスの開発を行っていきます。



Yamada (2009; JESP)
"Appreciating art verbally: Verbalization can make a work of art be both undeservedly loved and unjustly maligned"



Yamada et al. (2014; FQAP)
"The effect of an analytical appreciation of colas on consumer beverage choice"



Yamada & Kim (2016; SSJJ)
"Option-splitting effects in poll regarding Japan's right to exercise collective self-defense"



「ミニ新居」
第31回全日本DM大賞金賞グランプリ



ニート・ひきこもり等の状態にある若者への支援

人間文化学部 人間関係学科 准教授 原 未来

研究分野: 若者支援、ひきこもり、青年期教育

ニート・ひきこもりなどの状態にあり、生きづらさを抱えた若者たちは、今日数多く存在しています。かれらが再び社会に参加し、自らの人生を歩いていくためには、どのような支援や仕組みが必要なのでしょう。支援という言葉を超えて、協同・地域づくりの観点から、自治体や支援現場と共に、実践・研究を進めていきたいと考えています。

■不活発な状態にある若者たちが集う「居場所」づくり

ニートやひきこもり状態にある若者たちへの支援方途の一つとして、フリースペースを中核とした支援が注目されています。傷つき、孤立してきた若者たちが、自由に集い、交流することを通じて、自信や他者への信頼を回復していく場所であり、「居場所」と呼ばれることもあります。

2016年度には、地域の子ども・若者支援の拡張を目指した彦根市と共同研究をおこない、市内に、若者たちが集うことのできるサロンを開設しました(右図)。ニート・ひきこもり等の経験のある若者たちが参加し、短期間に、①他者関係の広がり、②主体的な行動の増加、③情緒面での安定・充実などの変化が見られました。地域商店の方々との協同・連携も進んでおり、孤立していた若者が地域に参加し、それによって地域も活気づいていくといった循環が生み出されようとしています。より生きやすく、豊かな地域の拠点としての役割を、若者たちのフリースペースが担う可能性も示唆されています。



■若者支援にかかわるスタッフの専門性の探究

不活発な状態にある若者たちへの支援は「若者支援」と呼ばれ、近年急速に拡大しました。しかし、その支援に関わる専門性については、学術的にも実践的にも体系的に明らかにされているとは言い難い状況にあります。そのなかで、暴力的な手法によって若者を変容させようという取り組みが「支援」の名の下におこなわれていることすらあります。

不活発な若者たちにかかわるスタッフに求められる理念・知識・技能とは、どのようなものなのでしょうか。現場と共に探求する必要があると考えています。不登校・ひきこもり支援をおこなってきた団体や、青少年育成を担ってきた団体、学童保育を担ってきた団体など、さまざまな団体のスタッフと実践を共有・議論するなかで、若者支援員の専門性とは何か、探求を続けています。

■地域における若者支援体制構築への寄与

2010年に「子ども・若者育成支援推進法」が施行されました。それに伴い、子ども・若者支援地域協議会を設置する自治体も増えてきています。滋賀県・彦根市の地域協議会に参加するとともに、地域の若者支援団体のスーパーバイズなども引き受けています。

また、「甘えた若者」とみなされやすい今日において、若者の状況への正しい理解や、若者支援体制構築の必要性を社会的に認知していくための活動として、講演活動もおこなっています(講演タイトル「現代の子ども・若者の実態と支援」「子どもの〈主体性〉を支える大人と地域」など)。

〈共同研究等の状況〉

・彦根市子ども・若者課(2016年度)、NPO団体芹川の河童(2016年～)、公益財団法人京都市ユースサービス協会(2015年～)など

人の主体的なふるまいに関する心理学研究

人間文化学部 人間関係学科 助教 後藤 崇志

研究分野: 社会心理学・教育心理学・認知心理学

研究室HP: <http://g01beza.web.fc2.com/>

人の主体的なふるまいに関わる心の仕組みに関心を持っています。具体的には、動機づけ・感情・意思決定等に関わる心理概念の研究を通じて、主体的なふるまいが実現されるメカニズムを明らかにしたいと考えています。また、パーソナリティ発達や社会化のプロセスにも関心があり、個人の価値や認知処理への社会的影響についても明らかにしたいと考えています。心理実験や質問紙調査、実践研究等の多様なアプローチから心の仕組みを明らかにし、社会・教育の改善に活かす知見の創出を目指しています。

■ 主体的なふるまいを実現する心の仕組みに関する研究

私たちの日常生活は行動選択の連続です。多くの人は、行動の選択は、自分の意志によって行われていると認識しています。しかしながら、私たちの行動選択の多くは、過去の経験や、周囲の環境・他者・出来事などの影響を受けています。実際に私たちが「いま、ここ」でおこなっている行動の選択とそれに伴う自分の意志に関する感覚が、どのような情報処理によって実現し、どのような機能を持っているのか、を明らかにしていきたいと考えています。主に取り組んでいるのは以下のような問いです。

1. 「やりたいこと」と「やらなければならないこと」といった認識の違いが、その後のふるまい方にどのような違いをもたらすのか
2. 「やりたいこと」「やらなければならないこと」といった価値観をどのように獲得しているのか
3. 私たちは「やりたい」「やらなければならない」といった気持ちや、これらの気持ちの葛藤にどのように対処しているのか（or対処するのがよいのか）
これらの問いを明らかにするために心理学の実験や調査による実証研究を進めています

■ 人の主体的なふるまいに関わる社会・教育のデザインに関する研究

教育実践の専門家との共同研究として、人の主体的なふるまいに関する心理学的な知見や手法を活かした社会・教育のデザインに関する研究を行っています。例えば、「主体的に学ぶ児童・生徒を育成するための教育ワークショップ」について、参加した児童・生徒の学習意欲の追跡調査を行い、教育ワークショップの有効性について多角的な視点から評価を行い、改善点の提案などを行いました。

→研究シーズとして提供・協力が可能なもの

- ▷動機づけ・感情・パーソナリティ等を質問紙や実験課題を使って測定する手法
- ▷教育効果や社会の仕組み等が人の感情・思考・行動に影響する過程を検討するための研究デザインの構築

特別養護老人ホームの公助・共助・自助・互助の力を 結びつける仕組みづくり

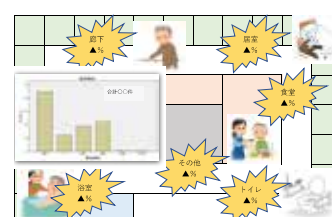
人間看護学部 人間看護学科 教授 河野益美、助教 森本安紀
研究分野：在宅看護学

特別養護老人ホームは、それぞれの施設に特徴があります。この個別性に応じたケアの質の向上を目指すために、蓄積された事故報告書のデータから、状況要因を明らかにし、早期発見と予防のための評価を行います。これをもとに、施設の事故対応システムの構築を行うことができます。このシステムに、生活している入居者の力も加えることを、新たに提案します。

■事故報告書の分析

施設の事故報告書の分析を行い「マップ」を作成するなど、見える化を行うことで、事故の認識を職員の間で共有しやすいようにします。

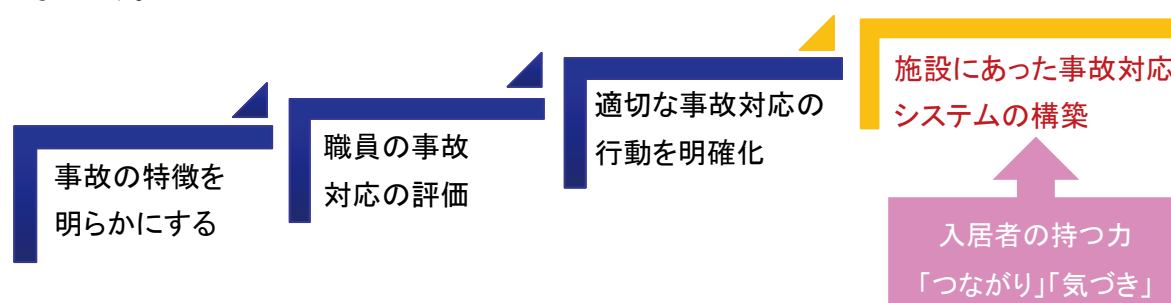
また、事故報告書の内容から、職種による特性や経験年数ごとの特徴というような、施設の事故の状況要因を明らかにします。



例) 転倒事故発生場所マップ

■職員の事故への対応の評価

マップや報告内容をもとに、発見時の状況について分析し、発生場所の特徴に合わせた早期発見と予防の評価を行います。その結果について施設スタッフと意見交換会を行うなど、リスクマネジメントの考え方について共有します。事故対応に必要な技術の評価することで、職員が適切な対応を行うために必要なファクターを見出すことができます。これに、入居者の持つ「気にかける力」や「発見したら知らせる力」なども含めて考えます。



■今後の課題：施設の特徴にあわせた事故対応システムの構築

施設の持つ個性に応じた事故対応システムを構築することで、職員は役割に応じた安心・安全なケアの提供が行えます。その中で、看護職は医療の知識や経験を活かして指導的役割を担い、より施設の持つ個性や職員の特性を活かした関わりを行う必要があります。

このような環境が、職員の離職を防ぎ、継続して働きやすい職場をつくりあげることにつながります。さらに、安心・安全なケアが継続して行われることにより、入居者の生活の質を向上することができます。入居者の持つ力も活かして公助・共助・自助・互助の力を結びつける仕組みづくりを目指します。



育児・療育支援のためのアプリケーションの開発 子どもの発達に関する知識の応用

人間看護学部 人間看護学科 准教授 大脇 万起子

研究分野：家族看護、育児・療育支援、ツール開発

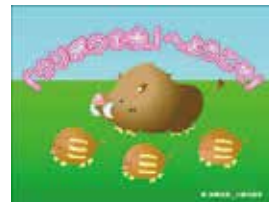
研究室HP: <http://www.uribow.org/>

支援対象者である地域で生活するお子様やご家族と、支援提供者である看護（研究）者が一緒になって、それぞれの立場から良いケアと良い生活を考え、実際に看護ツールを試用した看護ケアを行いながら、新たな看護支援方法の構築を目指しています。

■ ゲームソフトウェア「Uriboware」

「Uriboware」は、法橋尚宏（神戸大学大学院保健学研究科）と大脇万起子が著作権を保有する。市場にはない発達年齢1歳半以下の子どもでも使用できるゲームソフトウェアである。MacintoshおよびWindowsパソコンで動作する。「Uriboware」を操作するための「Uribowareボタン」は、USBポートに接続して使用する。アプリケーションはホームページを通じ、無償提供している。

（平成14年度～平成16年度 文部科学省科学研究費 基盤研究（C）「病障害をもつ子どもと家族へのインターネットを用いた在宅看護介入プログラムの開発」（代表 大脇万起子）による）



ゲームソフトウェアの
トップページ



Uribowareボタン

■ トーキングエイド「Uribow Talk」

「Uribow Talk」は、法橋尚宏（神戸大学大学院保健学研究科）と大脇万起子が著作権を保有する。脳の理解言語野には障害がなく、表出言語野に障害のある子どものためのトーキングエイドである。

「Uribow Talk」はホームページを通じ、貸出を行っている。

（平成17年度～平成19年度 文部科学省科学研究費 基盤研究（C）

「表出言語と知能に障害をもつ病児の電子合成音声による認知開発と社会参加への看護支援」（代表 大脇万起子）による）



「Uribow Talk」の利用者が
入力したじゃんけん画面

■ 育児記録ソフトウェア「Mamin」

「Mamin」は、大脇万起子ら看護研究者と大澤かおり氏（京都府八幡市手をつなく親の会会長）が考案し、作成した。アンドロイド版は細川賢二氏（ネクステージ、著作権保有）、iPod版は宮城茂幸氏（滋賀県立大学工学部）と名田太河氏（作成時、同工学部学生）の作成協力を得た。

アプリケーションはホームページなどを通じ、無償提供している。

（平成25年度～平成29年度 科学研究費補助金 基盤研究（C）「保護者を対象とした子どもの発達障害の早期発見・早期支援を円滑にする看護方法の開発」（代表 大脇万起子）による）



「Mamin」の一画面

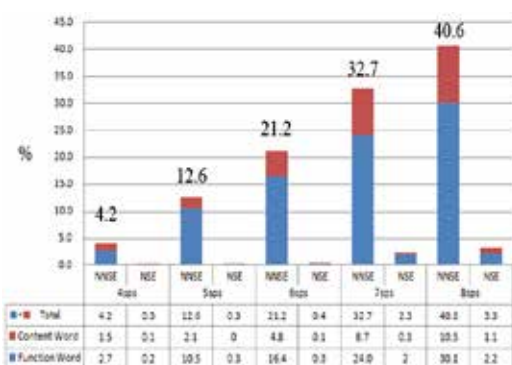
航空管制の安全を脅かす母語話者の発音の乱れと対策の研究

全学共通教育推進機構 准教授 ウォルター カート クリッガー

研究分野: 英語リスニング

研究室HP: <http://www.office.usp.ac.jp/%7Eklinger.w/>

航空管制は英語で行われるが、英語を母国語とする操縦士が日本の管制圏に入ってきた場合、あるいは日本人操縦士が英語を母国語とする国の管制圏に入ってしまった場合、日本人管制官や操縦士は母国話者の発する通話を必ずしも正確に聞き取れるわけではない。我々はこの現象を解明するために、主として現役の国際線操縦士及び管制官を被験者として現場でのリスニング状況を確認する実験を行う。



左の図は会話速度と聞き落とし率を示す。

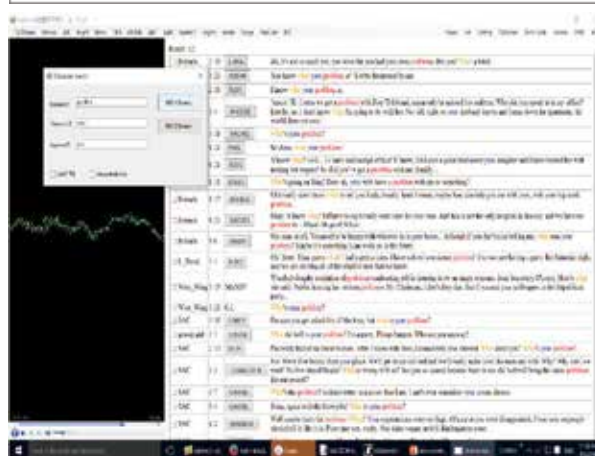
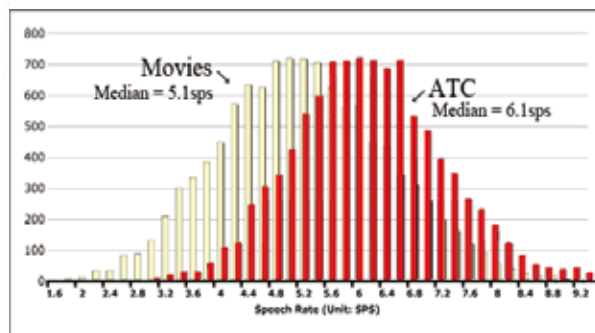
4sps (syllables per second) の速度の時にはNNSE (英語の非母語話者) 日本人被験者は4.2%の語彙を聞き落とし、5spsの速度になると13%、6spsの速度では21.2%、7spsは32.7%、8spsは40.6%と聞き落す単語の数が増えていく。NSE (英語母国語者) の被験者はエラー余り無い。この実験に参加した日本人31名被験者のTOEIC平均スコアは923.3。

下の図は米国での航空管制の通話の速度分布図を映画の会話の速度分布図と重ねたものである。航空管制の通話速度は映画よりも2割も速く6.1spsを平均としている。



上の図は日本人NNSE airline pilots 23名と航空輸送指令部 ATC controllers 10名の全員のリスニング結果。理解 (decode) できないと申告した箇所を薄い赤色で示して、そして全員の結果を重ねたものである。

右の図は我々発達している速達を調整、言語を検索の機能してる速達聞き取り勉強のためのソフトを示す。



研究課題名: 航空管制の安全を脅かす母語話者の発音の乱れと対策の研究

<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-16H03454/>

研究課題名: 重大インシデント回避のための航空管制英語の研究

<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-25370701/>

研究者別 研究分野・キーワード一覧

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
環境科学部	環境生態学科	教授 西田 隆義	生態学
		教授 小泉 尚嗣	地震地下水学 地震、地下水、地殻変動
		教授 伴 修平	水圏生態学、プランクトン生態学
		教授 丸尾 雅啓	水圏化学、分析化学
		教授 浦部 美佐子	陸水生物学、生態、底生動物、寄生虫、分類
		准教授 野間 直彦	植物生態学
		准教授 後藤 直成	陸水学、環境科学、生物地球化学、物質循環
		准教授 吉山 浩平	理論生態学
		准教授 堂満 華子	古環境学、微古生物学（浮遊性有孔虫）
		准教授 細井 祥子	環境微生物学、分子微生物学
		助教 籠谷 泰行	森林生態学
		助教 肥田 嘉文	環境科学、影響評価科学
		助教 尾坂 兼一	森林水文学 生物地球化学
	環境政策・計画学科	助教 工藤 慎治	大気科学、大気汚染物質、環境動態、発生源解析
		教授 金谷 健	廃棄物管理
		教授 井手 慎司	水環境管理
		教授 上河原 献二	環境法、環境政策、地球環境条約制度、自然保護制度、外来水生植物管理
		教授 高橋 卓也	環境経営、森林政策・計画
		教授 香川 雄一	人文地理学 環境地理学
		准教授 瀧 健太郎	流域政策・計画
		准教授 林 幸司	環境経済学、環境政策
		准教授 村上 一真	環境経済学、開発経済学、環境政策論、地域経済・政策論
		准教授 和田 有朗	環境政策、環境計画、環境システム、地域システム
		助教 小野 奈々	環境社会学、地域社会学、NPO・NGO 論
		助教 平山 奈央子	湖沼流域ガバナンス、水資源管理、住民参加
		助教 白木 裕斗	エネルギーシステム学、環境システム学
	環境建築デザイン学科	教授 陶器 浩一	建築設計、構造計画
		教授 村上 修一	ランドスケープデザイン、景観計画
		教授 高田 豊文	建築構造学 応用力学 木質構造 地震防災
		教授 芦澤 竜一	環境建築学
		准教授 金子 尚志	都市・建築環境設計、パッシブデザイン、クリマデザイン（室内気候のデザイン）
		准教授 ヒメネス ベルデホ ホアン ラモン	建築史・意匠 都市計画・建築計画
		准教授 轟 慎一	都市計画、生活空間論、コミュニティ論、地域環境デザイン、景観計画、都市システム論、集落論
		准教授 白井 宏昌	建築史、建築設計理論
		准教授 山崎 泰寛	近代建築史、建築メディア論、展覧会
		講師 伊丹 清	建築環境工学、建築設備
		講師 迫田 正美	建築歴史・意匠、建築空間論
		助教 川井 操	都市史、建築計画
		助教 永井 拓生	建築・構造デザイン、構造力学、連続体力学、数値計算力学、木質構造、竹構造、自然素材、建築保存・修復・再生、まちづくり、建築構造・材料 デザイン学
	生物資源管理学科	教授 増田 佳昭	農業経済学、協同組合論、農産物流通論、環境保全型農業論
		教授 鈴木 一実	植物病理学
		教授 大久保 卓也	環境工学、水質工学、生態工学、水文学
		教授 須戸 幹	環境化学
		教授 杉浦 省三	魚類栄養学、養魚飼料学、水産増養殖
		教授 泉 泰弘	作物学 栽培学
		准教授 岩間 憲治	土壌物理学、G I S（地理情報システム）
		准教授 原田 英美子	植物生理学、植物・分子生物学／細胞工学
		准教授 上町 達也	園芸学
		准教授 平山 琢二	動物行動生理学、家畜生産管理、応用動物管理学
		准教授 入江 俊一	応用微生物、分子生物、バイオマス変換、リグニン、木質バイオマス
		准教授 高倉 耕一	個体群生態学、行動生態学
		准教授 清水 顕史	植物遺伝育種学
		助教 飯村 康夫	土壌学
		助教 畑 直樹	蔬菜園芸学、植物工場
		助教 泉津 弘佑	植物病理学
		助教 増田 清敬	LCA、環境経済学、農業経済学
		助教 皆川 明子	生態工学 農業土木

研究者別 研究分野・キーワード一覧

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
工学部	材料科学科	教授 パラチャンドラン ジャヤデワン	金属材料、材料科学 ナノ材料化学
		教授 松岡 純	ガラス科学、熱物性、力学特性、無機材料
		教授 奥 健夫	エネルギー環境材料 光 量子情報 エネルギー 太陽電池
		准教授 宮村 弘	金属材料学、金属間化合物、表面処理
		准教授 吉田 智	無機材料、ガラス、破壊、強度
		准教授 秋山 毅	エネルギー環境材料
		助教 鈴木 厚志	有機太陽電池、エネルギー変換材料 有機半導体 量子コンピューター
		助教 鈴木 一正	有機-無機複合材料、蛍光材料、溶液プロセス
		教授 徳満 勝久	有機複合材料 高分子物性
		教授 金岡 鐘局	高分子精密合成、高分子機能
		教授 北村 千寿	有機環境材料 有機化学
		准教授 竹下 宏樹	高分子構造、高分子物性
		准教授 谷本 智史	高分子機能設計 ブロックポリマー、相分離、ミセル、ペプチド、吸着、表面、界面、微粒子、バイオミネラリゼーション、キチン・キトサン、貴金属イオン
		准教授 加藤 真一郎	構造有機化学、超分子化学、物理有機化学
		助教 竹原 宗範	生体機能材料 応用微生物学、遺伝子工学、生物工学
	機械システム工学科	助教 伊田 翔平	高分子合成、精密合成、リビング重合、高分子ゲル
		教授 安田 寿彦	福祉ロボット、メカトロニクス、非線形システム
		教授 山根 浩二	内燃機関、バイオディーゼル、燃焼、ディーゼル噴霧、油化学
		教授 南川 久人	流体工学、混相流工学、気泡工学
		教授 奥村 進	ライフサイクル工学、品質設計、メンテナンス工学
		教授 門脇 光輝	偏微分方程式論、特に数学的散乱理論
		教授 田邊 裕貴	材料強度学、破壊力学、表面改質、非破壊検査
		准教授 山野 光裕	ロボット工学、メカトロニクス、機械制御
		准教授 橋本 宣慶	生産加工学、人間工学、人工現実感
		准教授 河崎 澄	エネルギーと動力 燃焼工学、内燃機関
		准教授 安田 孝宏	流体工学
		准教授 大浦 靖典	機械ダイナミクス 振動工学
		助教 和泉 遊以	材料強度学、破壊力学、表面改質、非破壊検査
		助教 西岡 靖貴	アクチュエーター、ソフトメカニクス、空気圧制御システム
		助教 栗本 遼	流体工学、混相流工学
		助教 田中 昂	機械力学、振動工学、構造ヘルスマモニタリング
	電子システム工学科	教授 柳澤 淳一	デバイス工学、半導体プロセス工学、イオンビーム工学
		教授 岸根 桂路	集積システム、アナログ・デジタル融合集積回路
		准教授 一宮 正義	デバイス工学、光物性、超高速分光
		准教授 土谷 亮	集積回路、アナログRF回路、低消費電力技術
		助教 井上 敏之	集積回路、無線通信、光ファイバ無線
		教授 乾 義尚	パワーエレクトロニクス 電力工学、エネルギー変換、燃料電池
		教授 作田 健	センシング工学、磁気計測 磁気センシング応用
		准教授 福岡 克弘	非破壊検査、電気計測、電磁界解析、超電導応用
		准教授 坂本 眞一	熱音響工学、超音波エレクトロニクス
		助教 平山 智士	電磁流体力学、プラズマ工学
		助教 伊藤 大輔	非線形解析、制御、カオス理論
		教授 酒井 道	メタマテリアル科学、プラズマ理工学
		教授 砂山 渡	データマイニング、知能情報工学、教育工学
		准教授 宮城 茂幸	デジタル信号処理、画像処理、時系列解析
		准教授 畑中 裕司	医用画像工学、医用システム、知能情報学
	ガラス工学研究センター	助教 小郷原 一智	信号処理、特徴検出、惑星気象学 惑星画像処理、大気の数値シミュレーション
		准教授 山田 逸成	デバイス工学 赤外線 光デバイス 微細加工
		助教 山田 明寛	無機材料

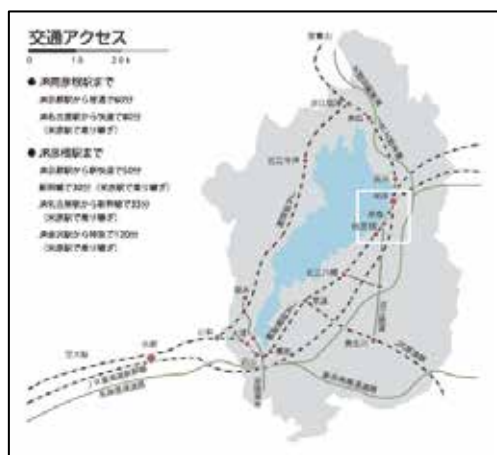
研究者別 研究分野・キーワード一覧

学部学科等	職名	氏名	研究分野・キーワード
人間文化学部	地域文化学科	教授 田中 俊明	朝鮮古代史、古代日朝関係史
		教授 定森 秀夫	朝鮮陶質土器、渡来人、渡来文化、地域間交流史、古代日韓交流史
		教授 濱崎 一志	建築史
		教授 水野 章二	日本中世史
		教授 中井 均	日本考古学
		教授 市川 秀之	日本民俗学
		教授 京樂 真帆子	平安京 都市社会史 女性史
		准教授 亀井 若菜	日本美術史
		准教授 東 幸代	日本近世史
		准教授 塚本 礼仁	人文地理学
		准教授 石川 慎治	建築歴史・意匠
		講師 武田 俊輔	社会学
		助教 横田 祥子	社会人類学、宗教人類学、地域研究
	生活デザイン学科	教授 面矢 慎介	道具学、考現学、デザイン史
		教授 宮本 雅子	居住環境 照明 色彩 住宅
		教授 印南 比呂志	地域デザイン、道具デザイン、伝統産業、ブランディング
		教授 森下 あおい	服飾デザイン
		准教授 横田 尚美	服飾文化史、西洋服装史、日本洋装史
		准教授 藤木 庸介	建築計画、伝統的居住文化の維持・保全
		講師 佐々木 一泰	空間デザイン
		助教 山田 歩	マーケティング論、消費者行動論
	生活栄養学科	助教 南 政宏	プロダクトデザイン、デザインディレクション
		教授 矢野 仁康	病態栄養学、分子細胞生物学
		教授 中井 直也	運動栄養学
		教授 福渡 努	栄養神経科学、栄養生理学、食品機能学 食品、栄養、代謝
		准教授 小澤 恵子	公衆栄養学、応用栄養学
		准教授 奥村 万寿美	臨床栄養学、栄養食事指導、食育
		准教授 廣瀬 潤子	食品免疫学、栄養教育論、小児栄養
		准教授 佐野 光枝	栄養生化学、分子栄養学、発生生物学
		准教授 今井 絵理	公衆栄養学、栄養疫学
		准教授 東田 一彦	運動生理・生化学、スポーツ栄養学
	人間関係学科	助教 遠藤 弘史	病態栄養学、分子細胞生物学
		助教 森 紀之	栄養神経科学、栄養生理学、食品機能学
		教授 細馬 宏通	会話分析、ジェスチャー、CMC、19世紀以降のメディア研究
		教授 松嶋 秀明	臨床心理学
		教授 上野 有理	発達心理学、比較認知科学、霊長類学
		教授 丸山 真央	社会学
		准教授 大野 光明	歴史社会学、社会運動論、沖縄、軍事化、「戦後」史
		准教授 木村 裕	教育方法学
		准教授 杉浦 由香里	教育学
		准教授 原 未来	若者支援、ひきこもり、青年期教育
	国際コミュニケーション学 科	助教 中村 好孝	社会学（社会学史、障害者福祉）
		助教 後藤 崇志	社会心理学・教育心理学・認知心理学
		教授 小栗 裕子	英語教授法、英語授業学
		教授 地蔵堂 貞二	中国語史
		教授 棚瀬 慈郎	文化人類学、チベット学
		教授 呉 凌非	言語処理・言語学
		教授 ジョン リビー	英語
		教授 小熊 猛	英語
		准教授 ボルジギン ブレンサイン	社会史 現代中国研究 モンゴル研究
		准教授 山本 薫	英語、英文学
		准教授 島村 一平	文化人類学、モンゴル研究
		准教授 河 かおる	朝鮮近代史
		准教授 マーティン ホークス	留学英語対策講座
		講師 吉村 淳一	ドイツ語学
		助教 谷口 真紀	新渡戸稲造研究、ジーン・シャープ研究 クエーカー信仰・国際平和・非暴力
		助教 橋本 周子	フランス史

研究者別 研究分野・キーワード一覧

学部学科等		職名	氏名	研究分野・キーワード
人間看護学部	人間看護学科	教授	伊丹 君和	基礎看護技術、教育工学
		教授	安原 治	神経解剖学
		准教授	窪田 好恵	看護管理、基礎看護学 看護倫理 重症心身障害児者看護
		准教授	米田 照美	看護管理
		助教	川端 愛野	基礎看護学
		助教	関 恵子	基礎看護学
		教授	古株 ひろみ	小児看護、家族看護
		教授	越山 雅文	母性看護・助産、女性の健康・周産期ケア
		准教授	板谷 裕美	母乳育児、助産ケア
		准教授	古川 洋子	母性看護、助産、いのちの教育、産み育て支援、社会的養護
		助教	川端 智子	小児看護、NICU
		助教	玉川 あゆみ	小児看護学、発達障害児の外来受診、家族支援
		助教	渡邊 友美子	母性看護学、助産学
		助手	濱野 裕華	母性看護学
		助手	堀内 遥子	母性看護学
		教授	糸島 陽子	エンドオブライフケア、成人看護学
		教授	平田 弘美	老年看護学、高齢者看護、認知症、攻撃的行動
		教授	横井 和美	臨床看護学、慢性期の看護、看護管理
		准教授	荒川 千登世	成人看護学、急性期・回復期ケア
		助教	生田 宴里	クリティカルケア看護、成人看護学
		助教	伊藤 あゆみ	成人看護学、慢性期ケア、肝疾患患者の看護
		助教	喜多下 真里	がん看護、緩和ケア
		助教	大門 裕子	成人看護学、口腔ケア、回復期ケア
		助教	中川 美和	成人看護学、慢性期ケア、糖尿病患者の看護
		助手	松井 宏樹	老年看護学
		教授	甘佐 京子	精神看護学、家族看護学、学校精神保健
		教授	河野 益美	在宅看護学
		准教授	小林 孝子	公衆衛生看護学
		准教授	牧野 耕次	精神看護学、かかわり、巻き込まれ、involvement
		助教	小島 亜未	公衆衛生看護学、在宅看護学
		助教	馬場 文	公衆衛生看護学、在宅看護学
		助教	森本 安紀	在宅看護学
		助手	川口 恭子	公衆衛生看護学、在宅看護学
		助手	下通 友美	精神看護学
		准教授	大脇 万起子	家族看護、育児・療育支援、ツール開発
	全学共通教育推進機構	准教授	ウォルター カート クリンガー	英語リスニング
	地域共生センター	准教授	鶴飼 修	地域計画、まちづくり、コミュニティビジネス 地域活性化、環境共生まちづくり
		准教授	萩原 和	コミュニティによる地域再生・地域創造 都市農村における地域計画、コミュニティデザイン
	産学連携センター	助教	上田 洋平	地域学、地域文化学
		教授	安田 昌司	知能システム制御、スマートコミュニティ、感性工学、経営学

※詳しい研究者情報は、ホームページ（<http://db.spins.usp.ac.jp/>）をご覧ください。



＜お問い合わせ先＞
 公立大学法人滋賀県立大学 産学連携センター

〒522-8533
 滋賀県彦根市八坂町2500
 TEL: 0749-28-8610 FAX: 0749-28-8620
 E-mail: chiiki_koken@office.usp.ac.jp
 ホームページ: <http://sangaku.office.usp.ac.jp/index.html>